

路上の まなざし

文と写真・秋尾信也

荒川区にある江戸時代創建の二つの寺院は、山谷界隈いで不遇な死を遂げた人々の弔いの場となっている。

南千住駅近くの延命寺には、同地にあった小塚原刑場で処刑された人々を弔う「首切地蔵」が鎮座。500歩離れた浄閑寺には、火事や地震で亡くなった遊女を弔う「新吉原総霊塔」がある。

生きて証し語り継ぐ

そして、2015年。台東区内の山谷地区に接する「光照院」に、引き取り手のない簡易宿泊所(ドヤ)の利用者や野宿者を供養する「あさくさ山谷光潤観音」が建立された。首に口ザリオが掛

動するNPOや介護・看護団体の墓も加わった。岳彦さんは、祖父と父親に次ぐ吉水家の3代目僧侶である。

そして3代目は、11年。前に「ひとさじの会」を発足。仲間たちと月に2回、出でて神学校に進学。卒業後、伝道者として、辞表を提出した。300円の日替わり定

の姿を案じた祖父の現祐さん(享年83)は、空襲で焼け落ちた境内に砂場や滑り台をこしらえ、子供会を発足して、読み書きを手ほどきした。

父親の裕光さん(元)は、ドヤで亡くなった人々の葬儀を積極的に引き受けてきた。

「お経を上げていこう、仲間がやって来て、ポケットのお金を廊下に置いて金だらけに入れていきました。その『ジャラ、ジャラ』という音と、志しの重みと、欠けた茶わんで飲み交わした酒の味は忘れません」

業後の1979年にドヤの2畳半に移り住んだ。その頃の山谷は、経済成長を支える日雇い労働者の町としてにぎわっていた。

「お経を上げていこう、仲間がやって来て、ポケットのお金を廊下に置いて金だらけに入れていきました。その『ジャラ、ジャラ』という音と、志しの重みと、欠けた茶わんで飲み交わした酒の味は忘れません」

東京五輪開催の年に、会社勤めをしながら山谷に通い始め、貧困の中で学校に行けない子供たちに勉強を教えた。当時のドヤには、3畳間に居住する家族たちが

「炊き出しで食を施すのではなく、安価でおいしい食べ物や毎日、継続して提供したかった」

食。コインを手にしたドヤの住民や野宿者が、連日80人ほどやって来る。「日雇い労働者はほとんどいなくなったが、不安定な就労は派遣や研修生に形を変えて続いている。だから店も伝道も続けていく」。生きる姿勢は、今も変わらない。

「死んだ後も、仲間といたい」。新信で野宿者支援をする団体と当事者たちに持ちかけられ、親音様を建てて7年前に「結の墓」を建立。それが契機となり、山谷で活

「炊き出しで食を施すのではなく、安価でおいしい食べ物や毎日、継続して提供したかった」

85年に初めて山谷を訪れ、6年後にはほしのいえを開所。炊き出しやアルコール依存症の自助活動の支援や生活相談に取り組んできた。

入りの口には、シスターと仲間たちが関わった「故人の名簿」がはってある。その数、90人。商店街で凍死した「いろはのおじさん」。野良ネコと路上で暮らしていた「ネコおじさん」。日雇いの町で立ちん坊(路上売春)をしていた女性たち……。一人一人の顔を浮かべながら、シスターは言う。



名前のない町山谷 4



光照院にある「あさくさ山谷光潤観音」胸に口ザリオが見える

「彼らの生きて証しを、これからも仲間と語り継いでいこう」

山谷とともに歩んできた宗教者の思いである。(専門編集委員) 次回は11日に掲載